

## 令和3年度第2回港北高校学校運営協議会議事録

(令和3年12月資料送付)

### 1 令和3年度港北高校学校運営協議員一覧

○産業能率大学経営学部長・教授

松尾 尚

○港北保護司会副会長

佐々木 貞貴

○認定NPO法人びーのびーの事務局長

原 美紀

○横浜保育福祉専門学校校長

加藤 孝夫

○横浜市立大綱中学校校長

生出 宏

○横浜市立太尾小学校校長

館 雅之

○神奈川県立港北高等学校同窓会副会長

田村 千恵子

○神奈川県立港北高等学校PTA会長

久保田 真也

○神奈川県立港北高等学校校長

松崎 剛

<事務局>

三上 実 本校・副校長

浦 寿 本校・教頭

佐藤 麗奈 教 諭 開発・広報グループ

関口 奈緒美 総括教諭 進路支援グループ

阪本 宏児 総括教諭 学習支援グループ

二瓶 信一 総括教諭 管理・運営グループ

中根 賢 総括教諭 生徒支援グループ

青柳 彰 総括教諭 活動支援グループ／開発・広報グループ

### 2 資料

- (1) 令和3年度第2回学校運営協議会次第
- (2) 令和3年度学校運営協議会会員名簿
- (3) 神奈川県立学校に設置する学校運営協議会の運営等に関する要綱
- (4) 港北高等学校グランドデザイン
- (5) 学校教育計画（令和3～5年度）
- (6) 令和3年度港北高等学校のスクール・ミッション（再定義後）について
- (7) 令和3年度港北高等学校のスクール・ポリシーについて
- (8) 令和3年度学校評価報告書（目標設定）中間報告

### 3 各部署からの説明

○<資料(4)～(6) 令和3年度港北高等学校のスクール・ミッション、スクール・ポリシーについて>

松崎校長より

スクール・ミッションは、県から港北高校のミッションとして定義されたものであり、スクール・ポリシーはそれを受け本校で作成するものである。スクール・ポリシーについては現在検討中のものであり、学校運営協議会でいただいた意見もふまえ、今後検討していく。本日提出している素案については、本校生徒として物事に素直に取り組む一方で、生徒自ら積極性が発揮できるよう、我々職員で支援していきたいというところを盛り込んだ。

○<資料(8) 令和3年度学校評価報告書(目標設定) 中間報告について>

#### 【教育課程・学習指導】

次年度の新入生から1年次で理科基礎科目3科目が必修になるなど、教育課程が大きく変わる。合計単位数も29から31と、非常に手厚い教育課程となっている。それに伴い、週1回7時間授業を実施する予定である。今後さらに一般受験の生徒や、多様な進路実現に寄り添うという意図を持ち、この教育課程を設定した。

オンライン学習の状況に関しては、同時双方向のオンライン授業の実現を目指し、どの科目でも積極的に実施した。生徒の適応力も非常に高く、スムーズな実施が実現できた。また、それに伴い教員同士の情報交換や課題の共有も活発に行われ、今後同じ状況が訪れてもスムーズに対応ができるのではないかと考えられる。

次年度は、神奈川県「授業力向上推進重点校」の指定を外れることとなるが、これまでの取組を継承し、次年度も研修等を企画していきたい。

#### 【進路指導・支援】

昨年度はコロナの状況もあり、模試等変更を余儀なくされたものも多かったが、今年度は模試や外部機関の利用等、予定通り実施できている。

3年生では、実力テストの結果がその後の学習に活かしきれていないのではないかという反省が現時点で挙げられている、今後はテスト受験前の準備、受験当日、返却まで長期的な視点を持ち支援をしていきたい。

進路状況については、昨年度卒業の50期生については、入試形態の変更やコロナの影響等もある中でも、例年と大きな変化はなかったといえる。いわゆるGMARCHと言われる大学の合格者も延べ70名以上であり、一昨年と比べるとやや実績を残したといえる。

#### 【地域協働】

コロナの影響で、例年実施している地域清掃活動やあすなる交歓会などの実施ができていない状況が一昨年から続いているが、最近では吹奏楽部の大倉山芸術祭への参加など、少しずつ交流が復活してきている。多くの交流がとれない中でもPTAや同窓会の皆様からは金銭的な支援や、間接的な教をいただき、感謝している。

学校説明会については、8月に1度対面で実施した。これについては300人×3枠の予約が開始5分で満員になるなど、本校に対し高い関心が持たれている様子がうかがえる。11月、12月の説明会については、コロナの感染状況等もふまえ、本校HPでの動画の配信で行うこととした。動画については3月末まで掲載しているので、ぜひ皆様にもご覧いただきたい。

#### 【学校管理・学校運営】

コロナ対策として、昇降口へのサーモグラフィーの設置、各教室へのアルコール消毒液を設置した。

学校運営に関しては、今年も不祥事ゼロ、事故ゼロを目指している。そのために毎月違うテーマでの標語の作成や研修を行っている。今後も研修のための研修や、マンネリ感を無くすために工夫を重ねたい。

#### 4 意見及び改善策の提案、質疑応答、各部署の状況等

委員：

PTA活動について、今年度はほとんど対面での活動はできていないが、現在はツールが整い、オンラインでの情報共有は進んでいる状況である。

本日6校時授業を参観したが、今後も授業の充実をお願いしたい。プリントを配付して終わりではなく、徹底的にやりこませ、教師にはぜひ生徒を引っ張りあげて行って欲しい。先生方には期待している。

委員：

コロナ禍の中でもカリキュラムを全うできた、ということが素晴らしい。大学では、2020年度は「オンラインをどうこなすか」、2021年度は「対面重視のなかで感染対策をどうするか」という難しさがあった。

スクール・ポリシーについて、どのように生徒に周知・理解をさせるのかわを知りたい。またそれを周知することで、生徒達に「自分は選ばれた生徒だ」と誇りを持って学校生活を進めて行って欲しいと考える。

本校：

スクール・ポリシーについては令和4年4月1日からの施行なので、在校生には今後提示していくこととなる。

委員：

中間報告について、双方向授業等の経験を、今後対面の授業に活かしていくという発想があるか。恐らく苦難も多くあったことであるから、その経験をぜひ共有して行ってほしい。

本校：

PCやプロジェクター等のツールについては、コロナ禍に関わらず職員は活用している印象があった。それがより多くの教員に広がったのが、双方向授業の結果であるといえる。しかしこれを今後学校教育全体にどう活かすか、というのはまだ難しいというのが現状である。今後検討したい。

委員：

進路支援について、2年生での学習時間の減少や、学年的に間延びしてしまうということについては、どのように対応・強化しているか。

本校：

学年を問わず、授業をもとにいかに関家庭学習につなげていくか、という視点を持って研修も行っている。今後学校としても、中だるみがないよう支援していきたい。

委員：

専門学校ではwifiの設置や端末の整備等を以前から行っていたため、オンライン授業にもすぐに対応できた。岩崎学園の方針として、現在もオンライン化が進んでいる。今後はオンラインと対面のハイブリッド型が求められると感じている。

スクール・ミッションについてはこの場での提示ではなく、事前に資料へ目を通したうえで

この場で検討する形式が望ましかった。

「自学力」という言葉は、当時「港北高校を前向きに変化させていけるように」との思いのもと、若手教員達から生まれた言葉である。その言葉が現在も生きていることは非常に嬉しく感じている。授業改善は教員の本来業務の一つであるため、今後も環境を活用し、積極的に取り組んでいてもらいたい。

委員：

授業改善について、教科での情報共有や検討はどれくらい進んでいるか。

本校：

授業力向上研修全5回のうち、3回は教科での協議する場を設けている。来年度も継続していきたい。

委員：

アクティブ・ラーニングが港北高校に根ざしていることが嬉しい。

このアクティブ・ラーニングについて、前任校での経験や知識をどの程度持ち赴任しているものなのか。また、今後も基軸として進めていくつもりか。

本校：

もちろん基軸としていくつもりである。各学校アクティブ・ラーニングは取り入れられているが、港北高校については特に盛んであるという印象を持っている。今後も重点的に取り組んでいきたい。

委員：

横浜市全体調査によれば、「子どもの世話をしたことがない」という人が親になることも多くなっている。そのような中で、港北高校の「発達と保育」の取り組み等を通しての期待は大きい。その地域との繋がりがこの2年間で止まってしまったところもあるが、それをこれからどのように再建していくのかを、インターンの受け入れやボランティアなどを通し一緒に考えていきたい。

2年間のコロナの状況のなかで、生徒と保護者の不安も大きかったのではないかと考えるが、その相談や、家庭の状況等に変化があれば教えてほしい。

本校：

消毒や日々の健康観察を始めとした感染対策に、生徒達はきちんと取り組んでいる。感染不安がある者についてはケアを続けてきた。現在、登校に不安を抱える生徒は減少してきている印象がある。

委員：

アクティブ・ラーニングは今後も港北高校の一つの伝統として継承して行ってほしい。子ども達はすでに小、中でかなり話し合い学習の経験を積んでいる。ぜひ高校でも継続し、小、中の学びを継続し、実践して行ってほしいと考える。

アクティブ・ラーニングの実践にはどうしても時間がかかり、基礎・基本の学習がおろそかになってしまうという側面もある。絶対評価において、子どもたちの中には、本来の実力と異なる成績がついているようにも見受けられる。そのように基礎学力が無い中でのアクティブ・ラーニングが、高校に限らず課題になっていると思う。

ICTに関しては、分野によって使い分けることが必要である。これはICT、これは対面と分けなければ、対人スキルが衰えていってしまう。日本の教育で何をベースにやっていくか、ということについてはオンラインを含め、今後変化していくのではないかという感想を持っている。